

当たり前前であることは

一年生から楽しみにしていた調理実習。その日は、水道が凍ってしまったほど寒い日だった。調理実習でまずすることはいえ、手を洗うこと。でも、水が出ないため廊下にある水道まで洗いに行った。流石に、廊下の水道で洗い物をする、他のクラスの授業の妨げにならなってしまう。だから、やかに水を貯え、家庭科室に持ち寄った。限られた時間で効率よく作業を進めなければならぬ。でも、やかなの水はすぐになくなってしまい、こまめにつきに行かないといけない。思わず蛇口をひねってしまふことが何回もあった。案の定、時間内で洗い物は終わらず、休み時間を削って終わらせることとなった。

今回の経験から、もし家の水道が止まってしまったらどうなるだろうと考えた。水が出ないということは、洗濯ができない、お風呂

天理市立福住中学校 三年

遠木 鈴華

にも入れない：考え付いたものはどれも日常生活に影響することばかりだった。私たちの生活は水があつてこそなりたっているといつても過言ではない。

私たちは、水の力を借りて生活している。それなのに、その水を、川を汚しているのは誰だろう。自分たちを支えてくれている水をきれいに保たなければダメなのではないだろうか。

小学四年生の時、学校のすぐそばにある川について調べた。実際に川に入り、「どんな生き物が住んでいるのか」とか、「水はどのくらいきれいなのか」ということを調べた。その結果、生き物は小さな魚がほんの数匹いた程度だった。その川の水は、汚いか、きれいかでいうと、まだきれいなほうだが、すぐきれいとまではいかなかった。川にゴミ

を投げ捨てる人がいたり、家の水道から油を流し処分する人がいたりする。なぜ、このようなことをするのか、私にはわからない。めんどろくもかもしれないけどごみはごみ箱に捨てる、油は流さず他の方法で処分するなど、最低限のマナーを守りさえすれば、それに答えるように水はきれいに保たれると思う。

そのことが、実際にデータに表れている。国語の時間に配られた「日本の水」という冊子。それを呼んでいるところなことが記してあった。日常生活で欠かせない、飲用・炊事・洗濯・入浴などを生活用水という。

二〇〇〇年度における生活用水使用量は年間約一四四億立方メートルであり、十年前の一九九〇年と比べると増えていた。そして、二〇〇〇年まで、増え続けていた使用量は二〇一〇年のデータを見てみると一三五億立方メートルまで、減少していることが分かった。なぜ、増え続けていたにも関わらず近年では、減少の方向に向いているのか。みんなが呼びかけ、一人一人ができる範囲で節水などに取り組み、水を大切にしてきた結果ではないのかと思う。私たちの地域では年に一度、

川の掃除をするなどのクリーンキャンペーンを行っている。大きなことではなくても、水を出しっぱなしにしないことや、川にごみを捨てないといった小さな取り組みも大切だ。「ちりも積もれば山となる。」どんな些細なことでも続ければ意味がある。

日本では八月一日を水の日、八月一日から七日までを水の週間とし、水資源の有限性、水の貴重さについての関心を高め、理解を深めるきっかけとして定められた。八月といえば、私たちは丁度夏休みだ。ゆっくり、水について考える日があってもいいと思う。

きれいな水が出るのが当たり前というところがどれだけ、ありがたい幸せなことかもう一度よく考えてみてほしい。そのことについて、一人一人がよく考え、どうしたらその当たり前を保っていかけるか考え続けられれば、自然とこの先自分ができることが見えてくるはずだ。